

## 経済学の古典から考える

### 「人工知能はわたしたちの社会をどう変えるか」

上智大学経済学部 教授 竹田 陽介

人工知能の進化が著しい。ディープ・ラーニング、自動運転車、癌の超早期発見、囲碁・将棋の読み、文豪や学者のアンドロイド、物流のロジスティックスのロボット倉庫など、毎日の話題に事欠かない。人間の手を経ず、自らによって人工知能が拡大再生産される・する技術的特異点（シンギュラリティ）が、2045年にも到来する勢い。かつての技術革新を牽引した電力、コンピューターなど汎用技術（ジェネラル・パーパス・テクノロジー）と同様、人工知能はわたしたちの社会をどう変えるか。

不断のイノベーションこそが経済成長の源であるとする経済学。産業革命を振り返った経済学の祖アダム・スミスは、著書『道徳感情論』のなかで、社会を構成する人間の本性とは何か、それが社会をどのように成立させているかについて、師と仰いだデヴィッド・ヒュームに倣い、「共感」に答えをもとめた。

「当事者のもともとの情念が観察者の共感的情動と完全に一致していれば、観察者には、それが正当かつ適切であり、必然的に情念の対象にふさわしいと思われる。（中略）したがって他人の情念を、つまり情念の対象にとってふさわしいものと認めることは、それに対して全面的に共感するということに等しい」。

社会生活を営むうちに、わたしたちはそれまでの経験をもとに、自分の心のなかに「胸中の公平な観察者」を形成する。人間の人間に対する行為に関する判断は、胸中の公平な観察者の観点から、まず、行為者の立場に立って行為の動機に適切性があるか、次に、行為を受けた側の立場に立ち、そのような行為を受けたときに自然に湧き上がる感情が、感謝か憤慨かを想像する。この第一の適切性、第二の感情に関する共感に応じて、行為が報償・称賛に値するか、処罰・非難に値するかの判断、つまり社会秩序が形成されていくことになる。

以下の論考は、私が指導する学部のゼミ生が作成・報告した「人工知能は社会構造を変化させるか：理論的推測」を下にしている。ゼミの報告は、アダム・スミス『道徳感情論』のみならず、ジョン・デューイの『学校と社会』、ソースティン・ヴェブレンの『有閑階級の理論』が総出の、さながらオムニバス映画のよう。ここでも共感を巡る多声的な話をしたい。

幼い子どもを喪った母親が長い間、人工知能を搭載したアンドロイドを亡き子に見立てて生活しながら、死を受容しているとしよう。あるとき、家に侵入した強盗が、家人に見付き、抵抗のなか家中を破壊し、椅子に据わるアンドロイドまで粉碎してしまう。子どもであるアンドロイドを死なしめた強盗を母親は誤って、手元にあった包丁で殺してしまう。

この事件を裁く裁判において、母親の正当防衛は認められるか。裁判員や裁判官のみならず、この事件を知る公衆は、アンドロイドという身を纏った子への母親の愛情を理由に、殺人という反社会的

行為をやむなしと判断できるか。

わたしたちは、周りにいる人があくびをすると、あくびが伝染してしまう。この現象は、チンパンジーの間でも見られ、野生のチンパンジーがあくびをするのを撮ったビデオを、実験室のチンパンジーが見ると、やたらとあくびを始める。あくびや笑いなどの伝染は、無意識の同調の力を反映する身体的同調である。

こうした情動伝染は、共感の起源と考えられる。仲間と暮らす動物はすべて、連携という任務に直面する。社会的に隔離した自閉症の子どもには、他者からのあくびの伝染が観察されない。他者と調和するために必要な同調性は、自分自身の身体を他者の身体に重ね合わせ、他者の動きを自分自身の動きにする能力に基づいている。

社会心理学者ジョナサン・ハイトは、現代版『道徳感情論』と言える著書『社会はなぜ左と右にわかれるのか』のなかで、道徳が、抽象的な原理から導かれるのではなく、直感的な判断に従っていることを示した。実験の中で、常軌を逸した行動の話が聞かされた被験者たちは、誰もが即座に間違っていると回答した。実験者が、被験者たちが非道徳的だと判断した理由ひとつひとつに対して、合理的な理由を付けて異議を唱えたところ、多くの被験者は、道徳的な説明に行き詰まり、その行動は間違っていると理由もなく言い張るようになった。

ハイトは、こうした人間の認知能力を「象と乗り手」に喩える。理由を考えるなど意識によってコントロールされたプロセスを掌る乗り手が、どれだけ思考を働かせても、情動、直感、見ることを含む自動的なプロセスを動かす象が動こうとしなければ、前には進まない。政治の左右の党派に関して言えば、象に当たる道徳基盤に違いがあり、リベラルな左派がケア/危害、公正/欺瞞にのみ拘るのに対して、保守的な右派は、それら以外にも忠誠/背信、権威/転覆、神聖/墮落とバランスの取れた道徳基盤に依存していることがわかる。

さて、アダム・スミスに話を戻そう。人工知能は一体、胸中の公平な観察者に基づき判断する「賢い人」あるいは世間の評価を気にする「弱い人」のどちらになるか。人工知能と共存するわたしたちは、共感に満たされる社会秩序によって守られ、互恵の場である市場が社会の繁栄を支えることになるか。

自己と他者が同一視される情動伝染に始まる共感の能力が人工知能に備わり、直感的な道徳的判断に従う象が、乗り手の思考を先導していくことは、人工知能に可能か。「人工共感」に関するロボット研究が将来、これらの問いに答えを出す日が来たとしても、母親の子どもへの愛情は何も変わらない。